

■資料

包括システムにおける健常成人の領域アプローチ

Location Approach among Healthy Adults in the Comprehensive System

西尾博行 (水間病院附属臨床心理学研究所)
高橋依子 (甲子園大学人間文化学部)

Hiroyuki Nishio (Clinical Psychology Institute, Mizuma Hospital)
Yoriko Takahashi (Department of Psychology, Koshien University)

要 旨

わが国の健常成人がロールシャッハ・テストに反応する時、各図版のどの領域を用いているかを検討する目的で、高橋・西尾(1994)の健常成人220名(男110名、女110名)の資料を用い、全被検者について各図版ごとに領域使用(領域アプローチ)のパターンを明らかにした。その結果、領域アプローチのパターンは全図版で601個確認された。領域アプローチのパターンの数は、図版によりかなりのばらつきがあり、最も少ないのはV図の26個であり、最も多いのはX図の100個であった。各図版における領域アプローチには多くの被検者が答える共通のパターンが認められ、図版によりやや異なるが、被検者の約50%から88%が10個前後のパターンに該当することが明らかとなった。

包括システムの解釈において、領域アプローチのパターンは、被検者の情報処理に一貫性があるかあるいは不規則かを知る上で重要である。解釈を行う時には、被検者の10枚の図版への領域アプローチの継起を基に、アプローチのパターンに変動があるかどうかを検討するが、その際、わが国の被検者の領域アプローチを理解する手がかりとなる実証的資料はこれまで示されていなかった。本研究で我々は、わが国の被検者の領域アプローチを検討する際に有効な客観的資料を明らかにした。

Abstract

In order to examine which location of each card Japanese healthy adults use when responding Rorschach test, patterns of location usage, that is location approach, in each card were reviewed using data from 220 healthy adults (110 male, 110 female) of Takahashi and Nishio (1994). As a result, a total of 601 location approach patterns were found from ten cards. The number of location approach patterns vary among cards; the least was 26 patterns of card V and the most was 100 of card X. Many of the subjects showed similar patterns of location approach depending on each card, and approximately 50 to 88% of their patterns fall into about ten patterns.

Location approach patterns are significant in interpretation of comprehensive system to find out whether subjects' information processing has consistency or not. When making interpretation, a fluctuation of approach pattern is examined from subject' location approach sequence of ten cards. However, no corroborative data have been published to help understand Japanese subject' location approach until today. This study presents valid objective data necessary when examining Japanese location approach.

キー・ワード：包括システム、領域、ロールシャッハ・テスト

Key Words : comprehensive system, location, Rorschach Test

はじめに

包括システムの解釈において、被検者のスコアの系列で、領域コードがどのような順序で出現しているか、すなわち、被検者が各図版でどの領域を用いたかという、領域アプローチのパターンを検討することは、被検者の情報処理に一貫性があるかあるいは不規則かを知る上で重要である。Exner(1991)は、「一貫性のある被検者は、通例、W反応の大部分を各図版の反応の最初に出すか、最後に出すが、それがごちゃまぜになることはまれである」と述べているが、アメリカ人と異なり、W反応の多いわが国の被検者にも同様の傾向が見られるかどうかの検討が必要である。そこで我々は、わが国の被検者がロールシャッハ図版の領域をどのように用いているのかを明らかにしたいと考えた。

目 的

わが国の健常成人がロールシャッハ・テストに反応する時、各図版のどの領域を用いているかを検討することが本研究の目的である。

方 法

本研究では、高橋・西尾(1994)の健常成人220名(男110名、女110名)の被検者の資料を用い、全被検者について各図版ごとに領域アプローチのパターンを明らかにした。すなわち、各図版で出現した領域コードの順序について、同じパターンの系列の被検者数を明らかにし、220人中の頻度を計算した。

結 果

領域アプローチのパターンの種類の総数は、全図版で601個確認された。領域アプローチのパターンの数は、図版によりかなりのばらつきがあり、最も少ないのはV図の26個であり、最も多いのはX図の100個であった。また、各図版の領域アプローチのパターンには、多くの被検者が答える共通のパターンが認め

られ、図版によりやや異なるが、被検者の約50%から88%が10個前後のパターンで反応していくことが明らかとなった。

表1に、まず、確認された各図版の領域アプローチのパターンの種類の総数を示し、さらに、その中での各図版の主要な領域アプローチの数を示した。示した順序は、アプローチの総数に占める主要なアプローチの比率の高い順とした。本研究で明らかとなった、健常成人の各図版の領域アプローチの全リストを掲載することは、紙面の都合で出来ないもので、ここでは220人中4人以上のもののアプローチを、主要なアプローチとして取り上げた。したがって、表1に示した主要な領域アプローチの数は、頻度が4以上のものである。

表1 各図版の領域アプローチのパターンの総数と主要な領域アプローチの数およびその比率

順位	図版	総数	(数 %)
1	V	26	(7 88.0)
2	IV	44	(11 79.0)
3	VI	41	(10 77.7)
4	VIII	52	(15 76.7)
5	III	52	(11 73.6)
6	VII	57	(9 72.0)
7	II	72	(13 63.2)
8	IX	72	(10 59.6)
9	I	85	(14 55.3)
10	X	100	(12 49.5)
	合計	601	(112)

表2は、各図版ごとの主要な領域アプローチの一覧表であり、出現頻度(被検者数)が4以上の領域アプローチを示した。さらに、その領域アプローチをとった被検者の人数(頻度)と、220人中の割合(相対度数)と、割合の累計(累積相対度数)を示した。また各表の最後に、その図版の頻度4以上の領域アプローチの数と領域アプローチのパターン

の総数を示した。

表2 主要な領域アプローチ一覧表

I 図

アプローチ	頻度	相対度数	累積相対度数
W-W	28	12.7%	12.7%
W-WS	15	6.8	19.5
W-D	12	5.5	25.0
WS-W	11	5.0	30.0
W-W-W	11	5.0	35.0
W	9	4.1	39.1
WS-W-W	6	2.7	41.8
W-W-WS	6	2.7	44.5
WS-D	4	1.8	46.3
W-D-W	4	1.8	48.1
WS-D-D	4	1.8	49.9
W-WS-W	4	1.8	51.7
W-WS-WS	4	1.8	53.5
W-W-W-W	4	1.8	55.3

(14/85)

II 図

アプローチ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	25	11.4%	11.4%
W-D	19	8.6	20.0
D	18	8.2	28.2
D-D	14	6.4	34.6
W-W	11	5.0	39.6
W-DS	10	4.5	44.1
D-D-D	8	3.6	47.7
W-D-D	8	3.6	51.3
D-DS	7	3.2	54.5
D-W	5	2.3	56.8
W-WS	5	2.3	59.1
W-DS-D	5	2.3	61.4
DS	4	1.8	63.2

(13/72)

III 図

アプローチ	頻度	相対度数	累積相対度数
D-D	51	23.2%	23.2%
D	39	17.7	40.9
D-D-D	20	9.1	50.0
D-DdS	11	5.0	55.0
W	9	4.1	59.1
D-Dd	7	3.2	62.3
D-WS	6	2.7	65.0
D-D-Dd	6	2.7	67.7
D-D-D-D	5	2.3	70.0
Dd-D	4	1.8	71.8
DdS-D	4	1.8	73.6

(11/52)

IV 図

アプローチ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	53	24.1%	24.1%
W-W	44	20.0	44.1
W-D	20	9.1	53.2
W-W-W	13	5.9	59.1
W-W-D	9	4.1	63.2
D	8	3.6	66.8
D-W	7	3.2	70.0
D-D	6	2.7	72.7
W-D-W	6	2.7	75.4
D-W-W	4	1.8	77.2
W-W-Dd	4	1.8	79.0

(11/44)

V 図

アプローチ	頻度	相対度数	累積相対度数
W-W	74	33.6%	33.6%
W	65	29.5	63.1
W-W-W	19	8.6	71.7
W-D	18	8.2	79.9
W-W-D	10	4.5	84.4
W-D-D	4	1.8	86.2
W-W-W-W	4	1.8	88.0

(7/26)

VI図

アソビ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	45	20.5%	20.5%
W-W	45	20.5	41.0
D	22	10.0	51.0
W-W-W	15	6.8	57.8
W-D	11	5.0	62.8
D-W	10	4.5	67.3
W-W-Dd	7	3.2	70.5
Dd-D	6	2.7	73.2
W-Dd	6	2.7	75.9
W-W-D	4	1.8	77.7

(10/41)

VII図

アソビ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	42	19.1%	19.1%
W-W	31	14.1	33.2
D	25	11.4	44.6
D-D	18	8.2	52.8
D-W	14	6.4	59.2
W-D	14	6.4	65.6
W-DS	5	2.3	67.9
W-W-W	5	2.3	70.2
D-D-W	4	1.8	72.0

(9/57)

VIII図

アソビ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	24	10.9%	10.9%
D-D	22	10.0	20.9
W-W	22	10.0	30.9
D	21	9.5	40.4
D-W	18	8.2	48.6
W-D	15	6.8	55.4
D-D-D	10	4.5	59.9
W-D-D	7	3.2	63.1
D-D-W	5	2.3	65.4
D-W-W	5	2.3	67.7
D-Dd	4	1.8	69.5

D-W-D	4	1.8	71.3
W-D-W	4	1.8	73.1
W-W-D	4	1.8	74.9
W-W-W	4	1.8	76.7

(15/52)

IX図

アソビ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	33	15.0%	15.0%
D	22	10.0	25.0
D-D-D	15	6.8	31.8
W-D	14	6.4	38.2
D-D	12	5.5	43.7
W-W	11	5.0	48.7
DS	9	4.1	52.8
WS	7	3.2	56.0
D-Dd	4	1.8	57.8
D-D-D-Dd	4	1.8	59.6

(10/72)

X図

アソビ	頻度	相対度数	累積相対度数
W	34	15.5%	15.5%
W-D	10	4.5	20.0
W-DdS	10	4.5	24.5
DdS	9	4.1	28.6
DdS-D	7	3.2	31.8
W-Dd	7	3.2	35.0
D-D-D	7	3.2	38.2
D-D-D-D	7	3.2	41.4
DdS-W	6	2.7	44.1
D-D	4	1.8	45.9
DdS-DdS	4	1.8	47.7
D-D-D-DdS	4	1.8	49.5

(12/100)

頻度は220人中の人数

考 察

本研究で我々は、わが国の被検者の領域アプローチを検討し、各図版に出現頻度の高い領域アプローチのパターンを明らかにした。

解釈にあたっては、各図版に比較的出現頻度の高いパターンを理解しておく必要がある。たとえば、各図版の第1反応がWで始まる被検者が、Ⅲ図でDの第1反応をした場合、本研究の結果を見ると、Ⅲ図でWが少ないことから、直ちに情報処理の一貫性に欠けるとは言えないであろう。

また、ある図版で領域アプローチに変動がみられた場合、そのパターンがその図版で健常成人に比較的多く見られるものである時には、情報処理の一貫性を時に欠くことがあっても、それが通常多くの人々が行う情報処理の仕方から著しく逸脱するものではないと言えることもできる。

一方、本研究で明らかとなった領域アプローチとは異なる領域の使用をする被検者は、通常多くの人々が行う仕方とは異なった情報処理をしているとも考えられるが、この点に関しては、精神分裂病者群などの臨床群の領域アプローチを分析してさらに検討する必要がある。

文 献

- Exner, J. (1991) The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 2: Interpretation (2nd ed.). New York: Wiley. 藤岡淳子・中村紀子・佐藤豊・寺村堅志 訳 1994 エクスナー法 ロールシャッフ解釈の基礎 岩崎学術出版社
- 高橋雅春・西尾博行(1994) 包括的システムによるロールシャッフ・テスト入門-基礎編- サイエンス社

1996年7月 1日 受稿
1997年8月15日 受理